提出日　平成24年1月20日

青年の境界例心性における愛着ネットワークと家族機能認知について

The study of attachment network and the cognition of family function in adolescents with borderline personality traits

臨床心理学研究科　臨床心理学専攻

1000-100716　長島杏那

指導教員　白崎けい子教授

問題と目的

近年，青年を対象とした心理臨床の現場では，境界例的な特徴をもちながらも日常生活を送ることが可能なレベルである人々が存在すると，心理臨床家の間で指摘されている（飯田ら，1999；牛島，1998）。こうした青年は，社会的には逸脱しない状況でありながら，日常生活で対人関係の問題を抱え，内的には不適応感を抱えている境界例心性という観点から検討されている。青年期は，自我同一性の確立という心理社会的発達課題があり，また，第2の分離個体化期（Blos，1965）と捉えた場合，親との未解決の問題が再燃する，不安定になりがちな時期である。極端な場合には，二次的な障害につながる可能性が指摘されている（松元，1996）。こうしたことから，青年を支援する際には，青年期固有の不安定さを理解することが求められる。境界例心性の中でも，対人関係の問題が顕著な青年は，発達初期に形成された愛着が不安定である可能性があり，愛着ネットワークという観点から境界例心性を検討することで，青年期心性の理解が深まると考える。また，親からの自立が求められる青年期には，家族機能が不全である場合，境界例心性の不安定さが助長される可能性がある。よって本研究では，青年期における境界例心性を取りあげ，対人関係の葛藤の背景として，発達初期の重要な他者との間に形成された愛着や，家族機能の認知に何らかの特徴がみられると考え，境界例心性と愛着ネットワーク及び家族機能認知との関連を検討した。

方法

1）調査対象：関東圏内の大学に通う学生250名（男性32名，M：20.44歳，SD=1.29，女性218名，M：19.51，SD=1.12）。

2) 手続き：質問紙調査法　(1) 愛着ネットワークの測定　：Antonucci ら（1980）のコンボイモデル（Convoy model）を援用し，危機状況と，幸せ共有状況を設定し，それぞれの状況においてどのような人物に近接を求めるのか調査した。(2) 情緒的利用可能性の測定：福岡・橋本（1997）のソーシャル・サポート尺度（6 項目 4 件法）を使用し，コンボイの第１の円の人物の中でも，特に近接を求める人を１人選択してもらい，その人物について回答を求めた。(3) 家族機能認知の測定：西出（1993）の家族アセスメントインベントリー　(30 項目 4 件法)。(4) 境界例心性の測定：田村・井上（2005）の対人関係における境界例心性尺度（22 項目 4 件法）。(5)基本的属性：年齢，性別，居住形態。

結果と考察

境界例心性と愛着ネットワークの構成人数との関連を検討したところ，幸せ共有状況と，危機状況，いずれの状況においても，関連は見られなかった。一方，愛着ネットワークの階層構造の中でも上位に位置し，かつ一番近接を求める主な愛着対象に関しては，境界例心性の程度による相違がみられた。境界例心性が中程度に高い青年では，危機状況において親などの養育者を愛着対象として選択しなくなる傾向がみられ，青年期には，友人や恋人，養育の場の外にいる大人に愛着対象が移行する可能性が示唆された。また，境界例心性の程度に関わらず，青年期においては，親などの身近な養育者よりも，それ以外の愛着対象に対する情緒的利用可能性が高いと認識していることが示され，自立を発達課題とする青年では，親をサポート資源として期待する傾向は弱まるものと推察された。

境界例心性と愛着ネットワーク及び家族機能認知との関連を検討するため，情緒的利用可能性が家族機能認知を媒介とし，境界例心性に関連するというモデルに基づいたパス解析を行った。その結果，情緒的利用可能性は，家族機能認知の下位尺度である「家族内コミュニケーション」，「家族に対する評価」，「家族の凝集性」と有意な正の関連があり，情緒的利用可能性が高ければ，家族内の交流や，家族の雰囲気，家族の連帯感の機能を高く認知していることが示された。また，情緒的利用可能性は，家族機能認知の下位尺度である「家族の柔軟性」，「家族内ルール」を媒介として，境界例心性に有意に負の影響を及ぼす傾向がみられた。このことから，青年の情緒的利用可能性が高い場合，その青年は家族機能を高く認知しており，家族機能のなかでも柔軟性と家族内での秩序が高ければ，境界例心性が低くなる可能性が示唆された。両親からの安定した関心が得られることは，家族が円滑に機能することにつながり，それによって他者との関係性も安定したものになると

考えられる。

本研究から，愛着対象の情緒的利用可能性と境界例心性は，家族機能を媒介として関連があることが明らかとなった。発達初期の二者関係に由来する表象モデルがたとえ否定的なものであったとしても，青年自身が，現在の家族を温かく柔軟な集合体として機能していると認知していれば，第２の分離個体化期にあっても，親との関係調整を適切に図り，安定した対人関係を築き，自我同一性の確立という発達課題を達成できると推察される。家族が円滑に機能できていることは，青年にとって二次的障害の保護要因になる可能性があり，青年の支援に際しては，家族を支援することで，問題の長期化，深刻化を防げることが期待できる。

青年の問題を考える上で，発達的な段階を無視することはできず，青年期の不安定さに起因する，非行やひきこもりといった二次的障害への予防的介入を考えるためには，通常の発達段階で起きる問題の基準を把握することが重要である。当該の問題が，どの程度リスクのあるものなのか査定できれば，発達的な危機における境界例心性の高さと，病理としての境界性パーソナリティ障害を識別し，適切な支援を行うことができると考える。